

## 物質と空間と時間の捉え方

最近なぜか仏教用語で気になる言葉がある。「依正不二」「色即是空」「塵点劫」である。仏教では「依報である環境と正報である主体は2つのものではない。」と説きます。つまり主体は環境を作り、環境は主体を生み出すというのである。私が思うに、この概念は相対性理論の「場の理論」と同じであり、物質の存在が空間を曲げ、2つは同時に存在しているという事である。つまり色（物質）は即、空（無常）であり、空間（環境）は物質（色体）を包含し常にそこに一緒に存在しているのである。また、この考え方は「塵点劫」の概念にも見受けられる。

「劫」とは計り知れないほど長い時間を表す単位として、「刹那」の対義語である。「塵点劫」には主に2つあり、「三千塵点劫」と「五百塵点劫」では教えの中で「五百塵点劫」の方がはるかに長い時間の概念である。具体的に「三千塵点劫」は法華経化城喻品第七に記されているが、「五百塵点劫」は法華経如来寿量品第十六に「五百千万億那由他阿僧祇（極めて大きな数）」の三千大千世界の国土を粉々にすりつぶして微塵とし、更に東方に進み五百千万億那由他阿僧祇の国を過ぎて一塵を落とし、以下同様にしてすべて微塵を下ろし尽くして・・・・下した下ろさないごとく合わせ（た国土を）微塵にし、その一塵を一劫とする・・・・長遠な時と、記されている。

解釈の仕方で「全世界の物質を原子の大きさで一列に並べていくのにかかる時間である」と説明する書物があって分かりやすい。がしかし、並べる行為や墨を垂らしていく行為は、よく考えると人によってもやり方によっても幅がありすぎて、あまりにも抽象的である。私が思うに、「宇宙の物質の総量」「すべての原子を並べた長さ」「時間（五百塵点劫）」の3者は、どの2つ（2者）をとっても双対性のある媒介変数として捉えていた！と直観する。つまり、この法華経に示すように釈迦は、時間の概念を実は3次元空間（ $x, y, z$ 軸）に時間（ $t$ 軸）を加えた4次元時空間（ $x, y, z, t$ 軸）の中で、 $x$ も $t$ も交換可能な双対な量である！と、そのまま自然に捉えていたのである。

「劫」<sup>ごう</sup>の概念の中で、「宇宙の物質の総量  $m$  」「すべての原子を並べた長さ  $r$  」について  
は、私の「虚点理論」(素敵な直観) p35 の『 $m \cdot r = K$ (定数)』と同値のものであり、 $m$   
と  $r$  は互いに双対で不二(2つのものではない)である。つまり、お釈迦様の概念では「依  
正不二」「色即是空」と同様に、「宇宙の物質の総量  $m$  」「すべての原子を並べた長さ  $r$  」  
「時間(五百塵点劫)  $t$ 」の3者は、どの2つ(2者)をとっても双対性のある媒介変数と  
して捉えていた!と・・・私は深く納得がいってしまった。

もう一つ大変に不可思議な用語がある。それは「久遠即末法」である。詳しく記すと、「久  
遠元初は即ち末法万年尽未来際である。」と説いている。久遠元初は釈迦が成仏した初めの  
時であり、末法万年尽未来際は末法という釈迦の教えが通じない時代がやって来てそのまま  
永遠に続く、という事である。始めと終わりの時を示して、その時代の人々の幸不幸が正反  
対であり、末法の今の我々は完全に不幸である。がしかし、その2つの時代の間を即ち!  
で結んでいるのである。これはいったいどういう事であろうか?・・・・・

近い将来、双対関係(を示す方程式の存在)によって、ある物の質量や空間(位置)や時  
間を特定できたとしても、因果律によってエントロピー増大の法則は厳然と存在し、過去に  
戻ることはできないはずである。では「久遠即末法」とは?過去に戻れない片道切符?・・・

久遠実成という言葉で、釈迦は宇宙の始まりのある種のポテンシャルを示したのではない  
だろうか!因果律やエントロピーに抗<sup>あらが</sup>うことはできないが、宇宙の法則(ある種のポテン  
シャル)に従って、終焉<sup>しゅうえん</sup>である末法の時代まで同じポテンシャルを持ち続けてエントロピ  
ーと同じく存在し続けるのである。仏教で言う所の仏の計らいとは、この大宇宙のリズム(法  
則)のことかも知れない!・・・つまり、一度は末法というとんでもない時代がやってくる  
と言って置いて、「でも、私(の悟り)と同じだよ!」と言っているのだ。だからそれはつまり、  
二重否定(むしろ強調)の様に『もっと良い本物が<sup>あらわ</sup>頗れる』と悟らせる深い仏教用語では  
ないか!と直観してしまう。(・・感無量・・・・・私だけでしょうか?!)



裏庭に薔薇が突然咲きました!

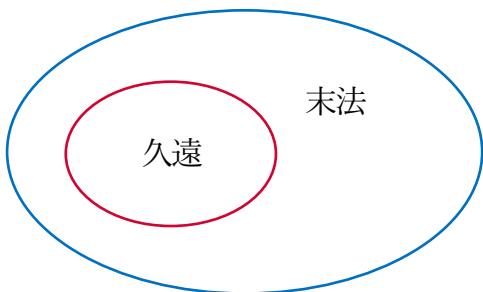


2025.11.28 自宅にて

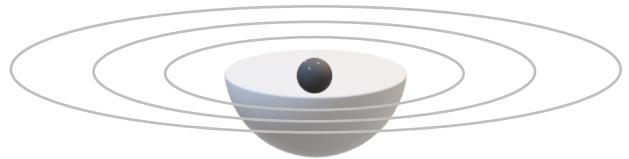
## 統 捉え方

長い時間を表すのに、「劫」の概念を用いるが、長い距離を表すのに、「光年」の概念を用いるのに似ている。ところで、物質の存在する所に必ず重力が存在する。また重力は、時・空間の歪みに沿った慣性力である為、逆に時間も空間も重力によって歪む(曲がる、変わる)と考えられる。つまり、相対性理論によると時間も空間も含めた時・空間において、「色即是空」であり「依正不二」なのである。やはり「物質」「空間」「時間」は双対性を持つある方程式の媒介変数なのである。ただし、時間の『過去⇒現在⇒未来へ向かう片道切符』は変えられない。仏教に「末法即久遠」という言葉もあるが、これは保存則に従うポテンシャルの話であって、真の命題ではない。私が感動(直観)した「久遠即末法」は先に述べた通り完全に真の命題であり真理である。(と思う。)

「久遠 ⇒ 末法」



「色即是空」「依正不二」



重力で時・空間が歪む(場の量子論)

今後気になることは、高次元の四次元への収束(畳み込み)について・・・等である。

我々の住む空間が、3次元( $x, y, z$ 軸) + 1次元( $t$ 軸)空間であることは古の時代より明らかであり、真実である。しかし、『光子の観測問題』(2重スリット問題)のように $3 + 1$ 次元の時・空間(四次元)だけでは、どうしても説明できない事象が現実に存在している。だからこそ現実を正しく認識するために、5次元以上の高次元を素直に認め、超双対性を持つ将来の方程式によって、観測者(の次元)が捉えた情報を上手に解析していくしか方法がないと思う。少なくとも言えることは、この宇宙空間が四次元(時・空間)ではなく、もっと多くの高次元(多次元)空間であり、その解析ツールがもうすぐ見つかりそうで、

まだ見つかっていないという事である！・・・・・・



2025.12.7 自宅にて